令和５年度　人権教育研究推進事業　＜人権教育研究指定校事業＞

都道府県・指定都市名	滋賀県	学校名	国際情報高等学校

人権課題	子ども・女性・高齢者・障害者・外国人	対象学年・取り扱った教科等	第１学年・ＬＨＲ	時数等	2

目標・人権教育のねらい	人権教育は、学校生活の中でさまざまな個性や価値観に出会い、一人ひとりの感じ方の違い・考え方の違いに気づき、お互いの違いを認め尊重できる姿勢を身につける。 そこで、中学校までの人権学習を振り返り、改めて「人権とは何か」ということについて具体的に考えることで、人権感覚を磨き、差別の芽に気づく力を培う。
実施した内容	各ＨＲ教室にて、そもそも人権とは何かを考える時間をとった。そのあと動画を２つ見ながら「アンコンシャスバイアス」について学び、自分の言動を振り返る時間を設けることで、自分の無意識の感覚意識を省みる機会を持った。
工夫した点	知的理解を促しながら考えさせることを目標にし、生徒が自ら理解を深めていくのに最も効果的なかたちとなるよう、授業を構成した。その際、昨年度教材の視聴が長く、生徒が意見を交流する時間を十分に確保することができなかったという反省から、内容を厳選した。また、ＴＶＣＭを活用することで、自分自身に身近なところに課題があるという意識が持てるようにした。 本校は総合学科として「産業社会と人間」という授業があり、１年生全員が自分の将来について真剣に考える。大学の専攻分野を選択する際、性別によって進路を決めてしまう場面を見せることで、無意識に持っている偏った見方について、自分に引き付けて考えられるよう工夫した。

令和５年度　人権教育研究推進事業　＜人権教育研究指定校事業＞

他教科との関連	特別活動・産業社会と人間
事業成果	知識的側面 　アンコンシャスバイアスについて、事前アンケートでは９０％弱の生徒が「まったく知らない」と答えたが、事後アンケートでは「よくわかった」「わかった」と答えた生徒が９５％、「とても興味が持てた」「興味が持てた」と答えた生徒が９３％、「新しいことをたくさん知ることができた」「少し知ることができた」と答えた生徒が９６％と高い評価を得た。このことから、理解を深めることができたと考えられる。 価値・態度的側面 　事前アンケートでは「アンコンシャスバイアス」について意識した（考えた）ことがあると答えた生徒は２％弱であったが、事後アンケートでは、自分自身（の経験）と結び付けて「よく考えられた」「少しは考えられた」と答えた生徒が９５％であった。このことから、自分の無意識の感覚について省みる機会となったと考えられる。 技能的側面 　事前アンケートでは約９８％の生徒が「アンコンシャスバイアス」について意識した（考えた）ことがないと回答していたが、事後アンケートでは、今日学んだ内容を今後に「大いに活かせそう」「少しは活かせそう」と答えた生徒が９８％であった。振り返りの中で「自分の言動には気を付けたい」であったり「そういった目（アンコンシャスバイアスがかかってないか）でＴＶＣＭにも注目したい」といった意見が見られたことからも、実施内容が響いていると考えられる。また、２年次系列選択の場で、アンコンシャスバイアスの存在に意識しながら、自らの将来像について深く考えることができた。

令和５年度　人権教育研究推進事業　＜人権教育研究指定校事業＞

都道府県・指定都市名	滋賀県	学校名	国際情報高等学校

人権課題	子ども・女性・高齢者・障害者・外国人・同和問題	対象学年・取り扱った教科等	第３学年・ＬＨＲ	時数等	2

目標・人権教育のねらい	アンコンシャスバイアスについて知ることで、さまざまな人権課題に対して自分にできることは何なのかを考えることができる。 また、身近に迫った進路決定において実際にあった差別と差別解消の歴史を学ぶことで、人権感覚を磨き、差別に立ち向かう力を養う。
実施した内容	１限：動画を見ながら「アンコンシャスバイアス」について学び、自分の言動を振り返る時間を設けることで、自分では意識していないことを省みる機会を持った。 ２限：滋賀県進路保障協議会から講師を招き、就職差別問題と進路保障というテーマで講演をしていただいた。
工夫した点	１限目では、ＴＶＣＭを通して、子育ては女性がするものであるという無意識の思い込みを題材に取り上げることで、アンコンシャスバイアスが誰にでも起こりうる身近な問題であるということ意識できるようにした。また、そこで自分の中にもアンコンシャスバイアスがあることを振り返ることができた。アンコンシャスバイアスについては、これまでにも学習する機会もあったと考えられる。単に知的理解にとどまらないものとするために、個人の中に深くつなげていきたいと思い、補足説明や考える時間をとった。 ２限目の講演では、途中で、講師と国際情報高校教員との面接のロールプレイを見せることで、バイアスがかかる場面をより具体的に生徒にイメージできるようにした。本校では、就職する生徒、進学する生徒が入り混じっている。特定の進路に限定するのではなく、「自分に深くかかわること」として人権を捉えられるように、講師や学年団と丁寧な打ち合わせをして取り組んだ。

令和５年度　人権教育研究推進事業　＜人権教育研究指定校事業＞

他教科との関連	特別活動・総合的な探究の時間
事業成果	知識的側面 　アンコンシャスバイアスについて、事前アンケートでは約９８％の生徒が「知らない」と答えたが、事後アンケートでは「よくわかった」「わかった」と答えた生徒が９３％、「とても興味が持てた」「少し興味が持てた」と答えた生徒が８６％、「新しいことを知ることができた」が９０％と理解を深めることができたと考えられる。 　また、進路保障と人権の講演については、事前アンケートで９２％の生徒が「知らない」と答えたが、事後アンケートでは「よくわかった」「わかった」と答えた生徒が９４％、「新しいことを知ることができた」が９６％であった。こうしたことからも、こちらも理解を深めることができたと考えられる。 価値・態度的側面 　１限の学習について、自分自身の経験と結びつけて考えられたと答えた生徒が９０％と、学習を通して自分を省みることができたと考えられる。また講演についても、「自分自身と結びつけて考えられた」と答えた生徒が９１％となり、自分の将来（進路）と結びつけて学び考えることができたと言える。 技能的側面 　アンコンシャスバイアスについて、今後に活かせそうと答えた生徒が１００％、講演についても今後に活かせそうと答えた生徒が１００％であった。また振り返りの中で「偏見や差別などに対して、より意識したい」という決意が多く見られた。今年度も不適正質問の報告はなかったが、振り返りの中で「不適正質問にどのように対処すれば良いかがわかった」という意見が見られた。また、就職試験後に「このような不適正かもしれない質問がありました。」と生徒からの報告もあり、不適正質問を意識した態度が見られた。

令和５年度　人権教育研究推進事業　＜人権教育研究指定校事業＞

都道府県・指定都市名	滋賀県	学校名	国際情報高等学校

人権課題	子ども・女性・HIV感染者等・「性と生命」の問題	対象学年・取り扱った教科等	第２学年・ＬＨＲ	時数等	4

目標・人権教育のねらい	海外（ケニア）の現状、エイズの現状を知るとともに、「性」については、個々で考え方が異なること、「自分らしく生きるとは」について考え、「性」と「人権」のつながりを学ぶことで、他者や自己の人権について考え、一人ひとりのかけがえのない生命の在り方に向き合っていこうとする意識と態度につなげる。
実施した内容	青年海外協力隊としての経験がある方を講師として招き、海外（ケニア）の現状を知ることで、異文化について学ぶだけではなく、自分の中にある偏見について考えた。クイズや画像、現地の写真を見せたり、ワークショップを行ったりすることで、すべての生徒が子どもや女性の人権、性と生命、ＨＩＶ感染症について考える機会が持てた。
工夫した点	講師と事前に相談を重ね、講演の中で液の交換ワークショップを取り入れ、生徒が実際に体験し学ぶ機会を設けた。事前アンケートや事後の振り返りを行うことで、じっくりと振り返って考える機会の確保をねらった。「性と生命」の問題は、ともすれば家庭科や保健体育科、生物の授業で扱えばよいと考えられがちである。しかし、「性と生命」の問題は、人間の根源的な問題であるとの認識を学年団と共有し、取り組むことができた。また、現地の写真や１日に食べるのに必要なお金など、具体的な数字データを示すことで、自分たちとは違う文化について理解を深められるよう工夫した。

令和５年度　人権教育研究推進事業　＜人権教育研究指定校事業＞

他教科との関連	保健体育・家庭
事業成果	知識的側面 　異文化理解について、事前アンケートでは「（そのような言葉を）まったく聞いたことがない」と答えた生徒が２０％いたが、事後アンケートでは「よくわかった」「わかった」と答えた生徒が約９８％、「興味が持てた」と答えた生徒が９０％、「新しいことを知ることができた」と答えた生徒が約９２％と、理解を深めることができた。また、事前アンケートでは「ケニアのイメージ」に対して、「サバンナ、野生生物、アフリカゾウ、貧困、発展途上国」といった回答が見られたが、事後アンケートでは「ケニアの現状について印象が変わった」「自分が考えていたよりも発展している地域があって驚いた。」と答えた生徒が多く見られた。 価値・態度的側面 　「自分自身（の経験）と結びつけて考えられた」と答えた生徒が約９６％、印象が変わったものとして、「ケニアの現状」、「HIV感染の現状」、「日本のHIV感染者の話」などが挙げられていたことから、漠然と知っていたことについて具体的に知ることができ、見聞を広めることができたと考える。講師の実体験に基づいた話が生徒の心に直接響いたこと、写真を見せることで具体的に想像できたこと、ワークショップに参加したことで体感できたことが、生徒の価値・態度的側面に良い影響を与えたと考える。 技能的側面 　講演の内容を今後に活かせそうと答えた生徒が約９７％であった。また、印象に残った内容でも、液の交換ワークショップを挙げている生徒が多く、ワークショップを通して、エイズの怖さや広がり方についてわかりやすく体感し、深く考えることができた。また、振り返りから、「自分の体より生活を優先する人が世界にいると知った。」・「貧困が酷すぎて体を売ってしまう人もいるんだと思った。」といった意見が見られるなど、「性産業」についても深く考えられた様子が見られた。今後、自分の性にかかわる行動についても「よく考えて行動したい」という意見が多く見られたことから、自らの身体、相手の身体を守っていく実践的な手法を身に付けることができたと考える。

令和５年度　人権教育研究推進事業　＜人権教育研究指定校事業＞

都道府県・指定都市名	滋賀県	学校名	国際情報高等学校

人権課題	インターネットによる人権侵害	対象学年・取り扱った教科等	全学年・ＬＨＲ	時数等	5

目標・人権教育のねらい	スマートフォン等の普及により、ネットトラブルに巻き込まれたり、無料通信アプリを使用した誹謗・中傷や、ネット上でのいじめ等の事案が数多く発生したりしている。これらの事案に対処するために、スマートフォン等の利用に関わるトラブルとその対処法について正しい知識を習得するとととともに、相手の気持ちを考え、思いやりの心を持つことの必要性・重要性についての理解を深め、正しく、有効的に機器を活用することのできる態度と技能を高める。
実施した内容	各ＨＲ教室にて、スライドを見ながら情報モラルについて学んだ。既習事項の確認、ＳＮＳ上のトラブル、インターネットを安易な使用によるリスク、トラブルに巻き込まれた際の相談機関について。
工夫した点	既習事項もあるが、改めて確認することで、大切なこと・自分にも深くかかわりのあることだと強調した。また、ネット上のトラブルについては、自分たちが普段使用しているＳＮＳアプリを例に扱うなど、自分の身近なこととして考えられるよう工夫した。 情報モラル、人権侵害は看過できないことであり、誰もが当事者になる可能性がある。そのため、被害・加害という見方だけでなく、「自分に深くかかわる」人権課題として考えられるように教材や指導方法、指導の場面の見直しを図ってきた。特に人権学習を特定の教科や人権ＬＨＲに限定せず、毎日の生活につながりを持たせるため、他教科での情報モラルの指導の機会も念頭に置いて、既習事項は「深める学習」を、まだ定着していない初めて出会う事柄については丁寧な説明、具体的な事例を用いて生徒の意欲・関心を引くということを心掛けた。

令和５年度　人権教育研究推進事業　＜人権教育研究指定校事業＞

他教科との関連	情報、保健体育、家庭、公共
事業成果	知識的側面 　学習内容について「よくわかった」「わかった」が１年で１００％、２年で９９％、３年で９９％とあった。また「新しいことを知ることができた」でも１年が８９％、２年が７６％、３年が７５％であった。「知っていた」という回答も少なからず見られたが、多くの生徒にとって、情報モラルについての理解を深めることができたと考える。 価値・態度的側面 　「興味が持てた」と答えた生徒が１年で９２％、２年で９７％、３年で９５％、「自分自身の経験と結びつけて考えられた」と答えた生徒が１年で９３％、２年で９３％、３年で９５％と、身近なＳＮＳについて興味関心を持ち、自分の行動を振り返って学ぶことができた。 技能的側面 　「興味が持てた」と答えた生徒が、どの学年においても９０％以上おり、また、「今後に活かせそう」と答えた生徒が１年で９３％、２年で９６％、３年で９４％となった。感想では、「今後、ＳＮＳに投稿する際には、しっかり判断してから投稿したい」、「むやみに画像をあげない」、「個人が特定できるような情報は載せない」といったものが見られ、今後の自身の行動について考える機会になったと考える。また、知識を身につけ、意識的になることで、実際にＳＮＳ上でのやり取りの中での気になることについて、学校へ相談してくるというケースもあった。

令和５年度　人権教育研究推進事業　＜人権教育研究指定校事業＞

都道府県・指定都市名	滋賀県	学校名	国際情報高等学校

人権課題	子ども・女性・性的指向、性自認	対象学年・取り扱った教科等	第３学年・ＬＨＲ	時数等	4

目標・人権教育のねらい	現代社会において大きな社会問題の１つである「ＤＶ」（ドメスティックバイオレンス：配偶者や恋人などの親密な関係にある相手を暴力によって支配すること）について学び、背景にある現代の社会構造や、自分を主体とした人権に気づく機会とする。また、若者に多い「デートＤＶ」についても学びを深め、こういった問題に対する人間関係の作り方、ＤＶに遭遇した場合にどのように対応すれば良いかについても学習し、実践的態度の育成を図る。
実施した内容	立命館守山中学校・高等学校の養護教諭を講師として招き、デートＤＶについての講演をしていただいた。具体的な事例を挙げて説明してもらうことで、身近な問題であると考えさせることができた。また、事前アンケートでＤＶチェッカーを行い、講演ではその内容についての解説もしていただいた。
工夫した点	近隣の高校の先生に講師をお願いし、直接会って打ち合わせを行ったことにより、本校生徒の実態に合わせた指導内容とした。特に、講師の先生が用意した短時間の動画が生徒の実態や意識に近いものとなり、ＤＶについてわかりやすいものだった。また、事前アンケートの中でＤＶチェッカーに取り組んでから講演を受けることで、自身のＤＶに対する考えについて省み、あらかじめ身近なこととして認識したうえで講演に臨むことができた。 ３年生は２年次に「性と生命」の講演を聞いている。本校の人権学習はこれまでの学習や理解を自分の中でどのように深めていくかということを考えている。ＤＶを性に限定せず、支配や被支配といった関係を考えながら、よりよいパートナーとの関係やチームの関係の実現に向けたものとしている。

令和５年度　人権教育研究推進事業　＜人権教育研究指定校事業＞

他教科との関連	保健体育、家庭、公共
事業成果	知識的側面 デートＤＶについて、事前アンケートでは「聞いたことはあるが、詳しくは知らない」「まったく知らない」と答えた生徒が９６％いたが、事後アンケートでは「よくわかった」「わかった」と答えた生徒が約９８％、「興味が持てた」と答えた生徒が９５％、「新しいことを知ることができた」と答えた生徒が約９５％と、理解を深めることができた。感想の中でも「ＤＶチェッカーがわかりやすかった」や「デートＤＶは身体的なもの以外にもあることを学んだ」「今のうちに気づくことができて良かった」といったものが見られた。 価値・態度的側面 自分自身（の経験）と結び付けて「よく考えられた」「少しは考えられた」と答えた生徒が９６％と、「興味が持てた」と答えた生徒も９５％、感想の中でも「いろんなことがＤＶになると知った」「イギリスの警察が紅茶に例えて説明していた動画がわかりやすくて印象に残った」「自分にも関わってくることだから、とても重要なことだと思った」「将来に役立つことを教えていただきありがとうございました」といったものが見られ、デートＤＶについて学んだことを今後の生活に活かしていこうとする意識も見られた。 技能的側面 「今後に活かせそう」と答えた生徒が９５％、感想の中でも「今回の講演のことを忘れずに気をつけていきたい」「自分の言動にもっと気をつける必要があると思った」「デートＤＶは男性から女性というイメージがあったので、自分が固定概念を持っていることに気づけた」といったものが見られた。また、生徒たち自身が持っているこれまでのデートＤＶに対する意識が変わっただけではなく、被害にあったときの具体的な相談窓口をスマートフォンで検索するなど、今後の行動につながった。

令和５年度　人権教育研究推進事業　＜人権教育研究指定校事業＞

都道府県・指定都市名	滋賀県	学校名	国際情報高等学校

人権課題	子ども・同和問題	対象学年・取り扱った教科等	第２学年・ＬＨＲ	時数等	3

目標・人権教育のねらい	現在未だに「部落問題」が残っていることを知り、あらゆる差別事象が不当なものであり、差別される側に大きな傷を残すということを認識するとともに、生徒が自分自身も差別をなくしていこうとする推進者であるという自覚を培う。
実施した内容	各ＨＲ教室にて事前学習として、スライドを見ながら同和問題に関する歴史的な流れについて知識を学び、「部落差別問題」とは何かについて、動画を見て考えたり、周りと話し合ったりすることにより理解を深めた。講演会では、以前、本校で勤務をしていた方を講師に招き、前時の内容（基本知識）の確認をしながら、今なお残る部落差別問題について、自分の経験や具体的な事例を挙げながら話をしていただき、生徒たちが理解を深める機会を設けた。
工夫した点	当事者がいるかもしれないことを念頭におくことや指導に内容について事前学習のためのスライドを作成した。該当学年と事前打合せで共通理解を図ったうえで、生徒が興味関心をもって前向きに学ぶことができるよう、写真やクイズを入れるなど工夫した。ＨＲでの学習は複数体制で行い、生徒の様子を丁寧に観察し対応できるよう心掛けた。講演では事前に講師の先生と打ち合わせを繰り返し行い、生徒が興味を持ち、自分にもかかわりのあること、現在も部落問題が残っていることと考えられるよう、講師の経験や具体的な事例を取り入れるなどの工夫をした。また、教員自ら自身の部落差別問題についての思いを語り、立ち位置を示すことにより、共に差別をなくしていこうと呼びかけ、実践的行動を促す機会を持った。

令和５年度　人権教育研究推進事業　＜人権教育研究指定校事業＞

他教科との関連	特別活動・日本史
事業成果	知識的側面 　部落差別問題について、事前アンケートで「これまで学習したことがある」と答えた生徒が約９０％とあったが、事後アンケートでは「よくわかった」「わかった」と答えた生徒が約９９％、「興味が持てた」と答えた生徒が９６％、「新しいことを知ることができた」と答えた生徒が約８５％と、理解を深めることができた。また講演の感想の中では、「自分には関係のない、遠い話だと思っていたが、そうではない身近にある問題と分かった。」や、「今もこうした問題があることに驚いた。」「こうした差別はおかしい。」といった意見が多く見られ、講演を聞いたことで、より理解を深めることができたと考える。 価値・態度的側面 　自分自身（の経験）と結び付けて「よく考えられた」「少しは考えられた」と答えた生徒が８３％と、「興味が持てた」と答えた生徒も９６％、感想の中でも「身近にある問題。今もある問題。」「話題にしなければなくなると思っていたが、それではダメ。正しい知識をしっかり学ばないといけないと思った。」「自分が差別をしないで終わらず、周りで聞いたら、ちゃんと注意できるようになりたい。」といったものが見られ、講演での話は、生徒に深くささり、部落差別問題が身近な問題であることに気づき、態度として示していこうとする意識が高まったと考える。 技能的側面 　「今後に活かせそう」と答えた生徒が９６％、感想の中でも「自分の考えを改め、今後に活かしたい。」「自分の言動にもっと気をつけたい。」「差別をなくすために、まずは自分が正しい知識を。」「今も部落差別問題があると認識を改められた。」といったものが見られ、部落差別問題について理解が深まったこと、また、自分が差別をしないでとどまらず、差別をなくすためにできることを心掛けるといったこと、差別が時に人の命を奪うことといった、大切なことを考える良い時間になった。